

# ジョイスの『ダブリン人』再考

## ——「死せる人々」との係わりについて

林 和 仁

ジェイムズ・ジョイスの短編集『ダブリン人』の批評で目立つのは、最後の「死せる人々」が他の諸編とは内容が異なっており、ダブリン及びアイルランドに対して、より好意的な態度を示しているとする見解である。小論では、短編集に統一感を与えている共通の主題や技法に、「死せる人々」が一致しており、『ダブリン人』がこの最後の話を含めて一卷のアイルランド批判の書となっていることを論じると共に、「死せる人々」にのみ言われ勝ちなダブリンに対する愛着心が、他の短編にも窺われることを指摘して、『ダブリン人』全体に見られる作者の複雑な心理を探ってみたい。<sup>1</sup>

『ダブリン人』を論じる際に、多くの批評の基盤となっているのは、ジョイスがグラント・リチャーズに宛てた手紙である。

私の意図は祖国の精神史の一章を書くことにあって、ダブリンを舞台に選んだのは、この街が麻痺の中心であると思ったからです。私はこのことを無関心な大衆にその四つの面から示そうとしました。幼年、思春期、成年、そして社会生活と、話はこの順序に並べられています。私はその大部分を意地悪く、こと細かに書きました。<sup>2</sup>

この手紙には『ダブリン人』の主題、構成、文体が簡潔に説明されており、作者の意図が明らかにされているが、殆んど批評家は、「麻痺の中心」と「意地悪く、こと細かに書く」を重視し過ぎるように思われる。そのため、この本のダブリンに対する批判的、否定的な面のみ強調され、ジョイスがなぜこの本

を著わし、なぜ最後の作品『フィネガンズ・ウェイク』に至るまで生涯ダブリンを舞台として書き続けたかという問いを無視することになるからである。具体的な例を上げると、六番目の話である「二人の色事師」を、A・ウォルトン・リッツは、「アイルランド社会の状態を冷酷に攻撃したもの」<sup>3</sup>と評するが、この短編の冒頭では、見慣れた街のけだるい夏の夕方の情景が、郷愁を思わせる抒情的な筆致で描かれている。

八月の灰色の暖かい薄暮が市にたれこめていて、夏の名残りの温和な風が、街々を巡っていた。通りは日曜日の休業で鎧戸をおろし、華やかに着飾った群衆でいっぱいだった。光に映える真珠のように街燈は高い柱の頂から、下の生きた流れを照らしていた。<sup>4</sup>

また「二人の色事師」と殆んど同時期に書かれた「小さな雲」では、イギリスから休暇を取ってダブリンに帰郷したギャラハーに、「本当にうれしいよ、分るかい、故里に帰って来て……この汚くって懐しいダブリンに着いてからすごく調子が良いんだ」(p. 75)と言わせているが、この好悪の念の混じった言葉、「汚くって懐しいダブリン (dear dirty Dublin)」に、『ダブリン人』全体に漂う、作者の屈折した感情が表わされているようである。

その他の登場人物についても、「精神的麻痺」と非難するだけではなく、その人物の環境、性格、感情を書き込むことによって、読者に批判の気持と同時に共感を覚えさせるよう配慮されている。例えば「イヴリン」には、女主人公が恋人と駆落ちする前に部屋を見回す場面があるが、これを『アイリッシュ・ホームステッド』誌に掲載された版と、『ダブリン人』に集録された改稿とを比較して考えてみたい。

自分の家、彼女は部屋を見回して、数々の親しみ馴染んだ物を眺めた。いったい何回埃を払ったことか、少なくとも週に一回。ここは「一番良い」部屋だけれど、それでも埃がたまってくる。この部屋をもう十年、もっと

だわ、十二年も掃除して来て、部屋の中にあるものを全部覚えてしまっていた。今、彼女は出て行くのだ。

自分の家、彼女は部屋を見回して、何年も掃除をしてきた、数々の親しみ馴染んだ物を眺めた。こんなに埃がいったいぜんたいどこから降って来るのかしら。もう二度とこの見慣れた家具や置物を見ることはないのだわ。別れることになるうとは夢にも思わなかったのに。(p. 37)

改稿では無駄な表現が省かれ、簡潔で効果的な文章に直されているが、特にイヴリンの、埃がどこから入って来るのかという驚きや、見慣れた物に対する愛着心、また別離に際してためらう気持が、はるかに生き生きと読者に伝わって来る。このように主人公の性格や感情が強く印象付けられるために、結末でイヴリンがダブリンから去ることが出来ず、鉄柵にしがみついた気持が理解出来るのである。この場面の、「彼女は白い顔を、無力な獣のように、ただ静かに、彼の方に向けた」(p. 41)では、読者は、イヴリンがダブリンという檻に閉じ込められた動物のように、心が麻痺していることに批判の目を向けると同時に、それまでに書き込まれてきたイヴリンの心境を思っ、「無力な (helpless)」という言葉に表わされる、主人公の「どうしようもなさ」に同情を感じてしまう。

その反対に、最後の「死せる人々」がそれまでに『ダブリン人』の諸編では表現されなかった、アイルランドの「温かいもてなし (hospitality)」を初めて表わしたと考える批評家が多いが、その「もてなし」の本質には疑問がある。なるほど「死せる人々」ではジュリアとケイトが舞踏会を開いて、多数の客を招き、食卓に御馳走を並べて人々に供するところが描かれているし、主人公のギブリエルのテーブルスピーチも、「もてなし」を称えることに終始する。しかし実状はどうであろうか。アル中気味の甥、フレディ・マリンスの到着を聞いたケイトは、ギブリエルに耳打ちする。「ギブリエル、お願いだから、そっと下へ降りて行って、彼が大丈夫かどうか見て来てちょうだい。もし酔っ

ばらっているようなら、上げないでね。」(p. 182) ゲイブリエルの「もてなし」を強調するスピーチが温かく迎えられるのも、聴衆が食後の気分であることを考えれば、割引きして受け取る必要がある。しかもアイルランドの「もてなし」を称讃するゲイブリエル自身が、「本当を言っちゃえばね、僕は自分の国が嫌になってるんだ。大嫌いだよ」(p. 189)と思わず言ってしまうし、またジュリアとケイトを称えるスピーチの準備をしながら、「二人の伯母が、只の無知な年寄りだからと言って、どうってことはないさ」(p. 192)と考えている。

さらに九番目の話、「対応」でも、「アイルランドのもてなし」が皮肉に扱われている。酒場で、「オッハロランが皆におごって、次にまたファリントンがおごった。そこでウェザーズは、このもてなしはあまりにアイルランド的だと異議を申し立てた」(p. 94)とあるが、酒を振舞っているファリントンは高い酒ばかり注文するウェザーズを苦々しく思っており、「憎たらしく思うものが一つあるとすれば、それは只酒を飲むやつだ」(p. 95)と考えているのは、「もてなし」の心境とはほど遠い。以上を見れば、「死せる人々」だけが「もてなし」を扱っていて、ダブリンに好意的であるとは思えないし、『ダブリン人』の他の話が、ダブリン批判しか表わしていないとする一面的な見方を承認し難いことが分る。

「死せる人々」が他の『ダブリン人』の話とは異なるとする見解は、フロレンス・L・ウォルツルに代表されよう。

いくつかの重要な点で、「死せる人々」はそれまでの短編とは明らかに異なっている。それが、中編であり、より完成度の高い物語と言うだけでなく、アイルランドをより好意的に描いていることである。故国を捨てて外国で生活したことが、ジョイスの祖国に対する見方を変えたのである。<sup>6</sup>

最後の伝記的な考察については、リチャード・エルマンも、「死せる人々」を書いていた時のジョイスがダブリンに対して気持が柔らいでいたことを、弟のスタニスラス・ジョイスに宛てた手紙を引用して説明している。

彼〔ジョイス〕はローマから弟に、短編集〔『ダブリン人』〕にはダブリンのある点が欠けていると書き送った。「僕は〔ダブリンの〕本当の身内意識と、もてなしの精神を描けなかった。後者は僕の知る限り、ヨーロッパのどこにもないものだ。」<sup>7</sup>

しかし同じ手紙の後半で、ジョイスは次のように述べている。

そうしたところで、このような反省がいかに無駄か分っている。と言うのも、もしこの本を G. R. [グラント・リチャーズ] の示唆するように、「別の意味」を表わすように書き直したとしたら。……きつと僕の目の前には、インク壺の中で座っている、例の精霊とペンの背に座っている僕の文学的良心である強情な悪魔が現われることだろう。しかも結局、「二人の色事師」はアイルランドの一風景なんだから（書簡集，p. 110）。

この手紙はエルマンの言うように、ジョイスの心境の変化を表わしているものと言うよりは、文学的良心に従って『ダブリン人』を書いたことを正当化しているものと考えの方が妥当であろう。

作品として見た「死せる人々」が他の諸編とは異なるとする解釈は、『ダブリン人』の出版直後の匿名の書評、「『死せる人々』は他の話よりもはるかに長く、ペースと共感に満ちた、柔らげられた筆致で描かれている」<sup>8</sup>以来、数多くの批評家に支持されている。比較的最近ではアンソニー・バージェスも、「最後の『死せる人々』に至って初めて神秘と魔法の領域に触れるのであり、……ジョイスの初期の作品中、『死せる人々』に至って初めて、固有名詞が象徴的な働きを持ち始めるのである」<sup>9</sup>と述べているが、この意見が不正確なことは、十番目の話、「土くれ」で、「平和をつくり出す人（peacemaker）」と呼ばれる主人公の名がマリアであり、魔女を思わせる笑い方をする、このマリアが外出するのが万聖節の前夜、魔女が徘徊する晩であり、マリアの行く所では魔法のように物が次々となくなることを見れば明らかである。

はたして「死せる人々」が『ダブリン人』の他の話と本質的に違うのかどうかを、この話を本全体と比較しながら考えてみたい。『ダブリン人』についてヒュー・ケナーは、「一続きの物語集と言うよりは、一種の多面的な小説」<sup>10</sup>と呼ぶが、『ダブリン人』は明らかに短編集であり、一貫した話の筋を設定したり、各短編間の緊密な繋がりを強調することは、ケナー自身、「これは単一の事件にまとめたり、単一の筋を読みとる種類の構成ではない」（ケナー、p. 48）と認めているように、行き過ぎであろう。またその反対に、ジョイスの初期の作品を、その創作態度の変遷から分析するホーマー・オベッド・ブラウンは、『ダブリン人』の写実的描写が、「観察者と観察されるもの、の二元的分裂」<sup>11</sup>に基づいていると述べ、『ダブリン人』が短編集であることを強調して、その非連続性に意味があると考えている。例えば、「イヴリン」の冒頭の文章がお互いに繋がりのない文から成立っていることを指摘した上で次のように説いている。

『ダブリン人』は、お互いに明確な関連性のない、断片的な人生の諸相を描いた短編を寄せ集めたものである。ある話が終り、別の話が始まる。まず感じられるのは、その非連続性である。この印象は、各ストーリーが明確な始めを持たず、いつの間にか跡切れるように終ることによって、さらに強められる。確かに上に引用した〔「イヴリン」の〕文章には調子の、又は感覚的な統一感があるから、単なる断片を配列したものではないと反論することも出来よう。しかし、その統一感そのものが、非連続性の産物なのである。それは無力な受身の立場にいて、どうしようもなさにつ随する哀感であり、困難、苦痛の感覚である（ブラウン、pp. 14-15）。

短編を集成した『ダブリン人』に小説とは違って一貫した流れのないことは当然であるが、それを「非連続性」と呼んで、表現の内容の性格付けにまで適用するのは、「オッカムの剃刀の原則」に反する、不必要な複雑さを読み込むことと言えよう。さらに短編の技法にまで非連続の効果を当て嵌めるのは無理

であり、それよりもマーヴィン・マガラナーとリチャード・ケインが指摘するように、チェーホフの言う、「短編には始めも終わりもあってはならない」に表わされる、反アリストテレス的な近代短編小説の手法と考える方が妥当であろう。<sup>12</sup>

『ダブリン人』の構成については、先に引用したジョイスの手紙にあるように「幼年，思春期，成年，社会生活」と、ほぼ一生に相当するダブリン人の精神史であり、ウィリアム・ヨーク・ティンドルの言葉を借りれば、「十五の話は個別から全体へ、若者からほぼ成年まで段階的に進む」<sup>13</sup>と言えよう。しかしケナーのように、それぞれの短編群における互いの連結や対比を重視することは、『ダブリン人』全体の対応を無視する狭い見方をすることになり、時には無理な設定をすることにもなる。例えば、ケナーは思春期群（「イヴリン」、「レースのあと」、「二人の色事師」、「下宿屋」）について、「この一群は二つの女性を中心とした話と二つの男性の話を対応させている」（ケナー、p. 54）と言い、成年群（「小さな雲」、「対応」、「土くれ」、「痛ましい事件」）に関しては、「この四つの成年の話は、前の〔思春期群の〕対照の排列を変えている。今度は二つの男性を中心とした世界の後に二つの女性の世界が続く」と述べるが、これは事実反するので、「より正確に言えば、『痛ましい事件』の主人公は男の銀行員であるから、エトスを表わす二つの話に、二つのパトスの話が続くことになる」（ケナー、p. 56）と言い分けめいた表現をしている。

『ダブリン人』の配列をさらに細かく見ると、厳密には年代順になっていないことが分る。例えば、六番目から八番目までの主人公の年令は、それぞれ、三十才、三十四才、三十二才である。また十二編が出版社に送られた後に追加された「二人の色事師」と「小さな雲」が、「下宿屋」の前後に配置されたことについては、<sup>14</sup>「下宿屋」が結婚に至る過程を描いていることから、独身の男性を扱った「二人の色事師」と、結婚して子供のいる男を主人公にした「小さな雲」の橋渡しをしていると考えられるが、同時に二人の男性のやりとりを中心とした「二人の色事師」と「小さな雲」を単調さを避けるために離し、間に「下宿屋」を入れたとも考えられる。さらに「二人の色事師」を六番目に配置

して「イヴリン」と離れたのも、「イヴリン」に描かれている求愛の話が、「二人の色事師」の打算的な女性関係の話と混同されないよう考慮された結果とも推察される。以上のように、『ダブリン人』の配列に関しては、部分的な繋がりを見出すことが可能であるが、同時に他の解釈も可能であって、狭い連続の関係を各短編間に当て嵌めてゆくことは、『ダブリン人』の多様性を無視することになる。本全体を見た場合、数多くの対応が存在し、ロバート・スコウルズの指摘するように、「〔数多くの対応は〕、別々の話を融合させて、ある都市とある民族全体の肖像画を描き出す、主要な手段である」<sup>15</sup>し、ギーゼリンの主張する象徴に見られる統一性にも関心を向けるべきであろう。<sup>16</sup>

「死せる人々」と他の諸編には、多くの共通点、対応点が見出される。最初の話、「姉妹」には、肉体的及び精神的麻痺の終結としての死が語られている。少年がフリン神父の部屋の窓を通りから眺める場面、「もし亡くなったのなら、暗くかげった窓覆いに蠟燭の灯が映るだろう、と僕は考えた。死人の頭のところには必ず二本の蠟燭を立てることを知っていたから」(p. 1, 傍点筆者)は、「死せる人々」で、ギブリエルが伯母ジュリアの死を予想して、「たぶんまもなく、自分はあの同じ居間に腰かけているだろう。喪服をつけ、シルクハットを膝に置いて、窓覆いはひかれ……」(p. 222, 傍点筆者)と対応するし、「姉妹」でフリン神父の死を知らされた少年の想像、「部屋の暗闇の中に、中風患者の生気がない灰色の顔がふたたび見えるように思った。僕は頭から毛布をかぶって、クリスマスのことを考えようとした。だが灰色の顔がなおつきまどってきた」(p. 11)は、「死せる人々」の結末近くでギブリエルの想像する情景、「涙がさらに眼にあふれて来て、その一時的な暗闇の中に、雨の滴がしたり落ちる樹の下にたたずんでいる若者の姿が見えるように思った」(p. 223)とよく似かよっている。両短編では、二人の未婚の老姉妹が重要な役割を受持っており、主人公と係わりを持っている点が共通しているし、上記の引用で「姉妹」の少年が死者の幻を追ひ払おうと、クリスマスのことを考えようとしても、亡霊が付きまどって離れないことと、「死せる人々」がクリスマスの舞踏会の情景であるにもかかわらず、主の生誕を祝う敬虔さや喜びが表現されず、死の影が



全体を覆っていることとは対応をなしている。ただ、この「姉妹」と「死せる人々」の対応を、ジョン・ウィリアム・コリンソンのように、「この殆んど円環的とも言える話の流れは、その語り口と主題両方に見られ、『フィネガンズ・ウェイク』の構造を予示しているようである」<sup>17</sup>とまで見るのは、「死せる人々」との対応が「姉妹」以外の短編にも多く見られることから行き過ぎた意見であろう。

「死せる人々」を『ダブリン人』の総括とする考え方は多くの批評家に支持されているが、この短編が結末にふさわしい内容と深さを持っているにしても、ウォルツルの意見、「明らかに『死せる人々』は洞察と認識の物語であり、『ダブリン人』がずっと辿って来た、感受性の麻痺の進行を逆転させるようである」（ウォルツル、p. 430）は極端に過ぎるように思われる。さらにブラウンは、この「逆転（reversal）」の概念を『ダブリン人』全体に適用して、前述の「二元的対立」が「死せる人々」の中で「融和され、解決されている」（ブラウン、p. 89）と主張している。この二人の意見は、「死せる人々」の結末の一面的な解釈を強調し過ぎたための結果と思われる。この話は多様な評価を受けているが、その殆んどが結末の理解の仕方の違いに由来するものなので、少し長くなるが、結末の文章を引用して考察してみたい。

サラサラと窓ガラスに当る軽い音が、彼を窓の方に振り向かせた。また雪が降り始めたのだ。彼は街燈の光へ斜めに落ちかかる、銀と薄墨の雪片を眠たげに眺めた。西への旅に出かける時が来たのだ。そう、新聞の言う通りだ。アイルランド中すっかり雪なのだ。雪は暗い中部平野のいたるところに降っていた。樹木のない山々に、静かにアレンの沼沢にも降っていた。さらに西の、みだれさわぐ暗いシャノン河の波の上に静かに降っていた。マイケル・フュリィが埋められている、丘の上の寂しい墓地の隅々にも降っていた。ゆがんだ十字架や墓石の上に、小さな門の檜先に、葉も実もないいばらの上に、雪は吹き寄せられて厚く積っていた。全世界にひそやかに降りかかり、すべての生あるものと死せるものの上に、その最後の

時が落ちかかるように、ひそやかに降りかかる雪の音を耳にしながら、彼の魂はゆっくりと意識を失っていった (pp. 223-24, 傍点筆者)。

この頭韻を多用し、韻律の整えられた詩的な文章では「降りかかる (falling)」という言葉の繰り返すことによって雪の降る様と、ゲイブリエルが眠りに落ち込んでゆく感じが表わされており、特に「静かに (softly)」と「ひそやかに (faintly)」を「降りかかる」と重ねることによって、音もなく降りしきる雪の静かな動きと、かすかになってゆくゲイブリエルの意識とを合わせて再現している。傍点で示した言葉では、雪の明るさ、白さや、乱れる波で表わされる生のイメージよりは、暗さ、不毛、寂しさ、そして死を連想させる言葉や死そのものへの言及が、はるかに強く印象付けられる。しかも「最後の時が落ちかかる (the descent of their last end)」と言う表現や、原文では「死せるもの (the dead)」で文章が終ることを考え合わせると、ゲイブリエルは眠りに落ち入ると言うよりは、静かに息を引き取るかのようであり、全世界が白い死である雪に覆われてゆく情景が目浮かぶようである。

この結末をケネス・パークは、『『すべての生あるものと死せるものの上に』、すなわちこの両者が一体となっていること、すなわち現世の制限を、その制限を超絶した精神、物質的な分裂を越えた理想的な状態の精神から見た状態を描いている』<sup>18</sup>と解釈し、ウォーレン・ベックも、少し別の観点から、「意識を失う (swoon)」状態を、「生命のない休息ではなく、虚脱状態でもない、恍惚に似たすべてを見通すことの出来る夢幻の境地であり、そこでは直接的、個人的なものが普遍的なものへと広がるのである」<sup>19</sup>と見る。このような肯定的な結末の読み方に対して、ダーシ・オブライアンは、ゲイブリエルがダブリンから脱出出来ないことを指摘し、「死せる人々」の結末に、「冷やかなジョイスのペシミズムが同時に読者にも投げかけられる」<sup>20</sup>と感じている。エドワード・ブランダーも、『『死せる人々』は他のどの話よりも、静かに覆いかぶさってくる絶望の感情を決定的にして終っている』<sup>21</sup>と述べ、結末のゲイブリエルについて、「生きている死者の一人として、彼の最後の役目は死者と一体化する

ことである」(ブランダーバー, p. 122) と否定的な見方をしている。また結末に故意の曖昧さを読み取る学者もいる。ウォルツルは、「この結末の曖昧さはジョイスが故意に仕組んだものである」(ウォルツル, p. 423) と考え、バーナード・ベnstockも、「ゲイブリエルの得た啓示が彼の救いとなるのかどうかは、分らない」<sup>22</sup> と述べている。またウォルツルは先の発言に続けて、『『死せる人々』を先行の十四の短編の延長として読むと、結末は精神的麻痺の完結であるが、『ダブリン人』と関係のない独立した短編として見ると、結末は救いと取れる』(ウォルツル, pp. 423-24) と述べているが、「死せる人々」は明らかに『ダブリン人』に収められるよう意図されており、この話を含めて『ダブリン人』は一卷の短編集として成立しているのであるから、ウォルツルの考え方には納得出来ない。「死せる人々」の解釈を一つの意味に無理に限定する必要はないが、その成立状況を考慮しなくてははいけない。

「死せる人々」にはその題名が示すように、死のイメージが満ちている。ベnstockはこの話の中の死者を、「既に死んでいる者、死にかけている者、生きている死者」(ベnstock, p. 153) の三段階に分けているが、「死せる人々」はこの三種の死者が一体となる話であると解釈され得る。作中人物の間では常に過去の人々が話題に上るし、「マリNZ夫人が死ぬほどひどい風邪をお引きになるわ」(p. 206) や「街燈から幽霊のようにぼんやりした光が……」(p. 216) のように死や亡霊を連想させる言葉も多いし、最も明らかな死への言及は、柩に寝る修道僧の話であり、メアリ・ジェインはそれを、「柩は最後の時を思い起こさせるためのもの」(p. 201) と説明する。女主人役を務める老いたジュリアとケイトには死の影が付き纏っているし、舞踏会が終って客が帰る時の、「さよなら」が十三回も繰り返される場面では、皆が永遠の別れを惜しんでいるようにも思える。さらにゲイブリエルは、「ひとりで、またひとりで、皆亡霊となってゆく。年齢と共に、みじめに褪せ衰えてゆくよりは、何か熱情のまばゆい陶醉に満ちたまま、敢然と彼岸の世界へおもむく方がましなのだ」(p. 223) と思い、死者の存在を身近なものと感じて、先に引用した結末へ続いてゆく。

生きている死者 (the living dead) とは、肉体的に生きてはいても、精神的、感情的には死んでいる者のことであり、ジョイスの言う麻痺の状態である。「死せる人々」では、グレタの口を通して、昔死んだマイケル・フェリィが短くとも激しく生き、愛のために命を賭けたことを語らせることで、現実には生きている夫、ゲイブリエルの影の薄さと対比させている。グレタの心の中ではマイケルは生きているのであり、夫のゲイブリエルよりも感情的には大きな存在となっている。ゲイブリエルの感情麻痺は、マイケルの思い出を語る妻に問いかける言葉に表われている。

——きみが愛していたひとって言うわけかい、と彼は皮肉な調子で尋ねた。

——あたしが付合っていた若いひとで、マイケル・フェリィって名でしたの。

\* \* \* \*

——あ、それじゃ、きみはそのひとを愛していたんだね、とゲイブリエルは言った。

——ゴールウェイに居たころ、あたしはよくいっしょに散歩したわ。

\* \* \* \*

——きっときみは、そのマイケル・フェリィを愛していたんだね、グレタ、と彼は言った。

——あの時は、あのひとと、とっても仲が良かったの (pp. 219-20, 傍点筆者)。

ゲイブリエルは執拗に、「愛していたんだね」と尋ねるが、グレタは一度も「愛していた」とは言わない。これを夫に対するグレタの心遣いとか、グレタとマイケルとの交流が「愛」と呼ぶにはあまりにも幼い、少年と少女の思いであったと考えるよりは、「愛」という言葉のラベルを貼ることによって、愛という感情の本質には触れずに、愛を形骸化しようとするゲイブリエルの試みに対する、グレタの無意識の反発と理解すべきであろう。これには、「愛」とい

うあまりにも濫用されている言葉では表わし切れないグレタの感情と、自分のために死を選んだマイケルの想い出が込められていると言えよう。ギブリエルが「愛」という言葉に固執するのは、感覚的に理解出来ない感情を抽象的な概念で割り切ってしまうとする、精神的麻痺の一つの徴候であると考えられる。

同じような精神的麻痺は「死せる人々」の他の登場人物にも見られる。なぜ修道僧が柩に寝るのかと尋ねられたケイトは、「それが教団の掟だ」と繰り返すだけであるし、内容のない話を単調に続けるマリNZ夫人にも麻痺の徴候が見られる。「〔マリNZ夫人は〕スコットランドにどんなにすてきな場所があるか、どんなにすてきな景色があるかを、ギブリエルに語り続けた。……………彼女の女婿はとってもすてきに釣りがうまくって、ある日魚を釣った、すてきに大きな大きな魚で……………」(p. 191, 傍点筆者) このように何にでも「すてき (beautiful)」を使うのは、語彙の貧しさ以上に、感情の貧しさであり、物事を一面からしか見ない精神の硬化、麻痺の現われである。

このように死者、死期の迫っている者、生きている死者で満ちている「死せる人々」を考えると、結末の雪の場面だけに、肯定的な意味を読むのは無理のように思われる。この結末が様々に解釈される理由の一つに、雪の持つ、象徴としての曖昧さ、相反性が挙げられよう。アド・ドフリースによれば、雪は、「盲目、白色の無、死」を表わすと共に、「生命、再生」をも象徴する、とある。<sup>23</sup> エルマンは、「多くの意見のように、雪が死であるとは考え難い。というのも、それは生ける者の上にも死せる者の上にも等しく降っており、死が死者の上に降りかかるのは、まさに余分なことであり、ジョイスの意図したことではない」(エルマン, p. 260) と述べるが、雪を死そのものではなく、死を象徴化、美化したものと考えれば、物理的に死んでいる者を覆っても、「余分」とは呼べないだろうし、死の象徴としての、死人に着せる経帷子のイメージを思い浮かべれば、死である雪が死者の上に降りかかっても自然であると思われる。さらに「死せる人々」では、雪は死、あるいは生きている死者と結びついている。ギブリエル夫妻の登場と共に、初めて雪への言及があるが、雪の中

を来たグレッタに伯母達は、「生きたまま凍えて死んでしまうわ」(p. 177)と言うし、雪に覆われたダニエル・オコネルの立像を指して、ゲイブリエルが、「白い男が見える」と言って、「お休み、ダン」(p. 214)と挨拶する場面でも、死者と雪が一体となっているように思われる。結末に象徴的な意味の可能性を追求して、ゲイブリエルの超絶論的な視野の拡大を読み込むよりは、「死せる人々」全体に漂っている様々な死のイメージが結末で雪に統一され、生きている死者であるゲイブリエルが、自分が死者と等しい存在であり、アイルランド全土を死が覆っていることを認識して、死を受入れ、過去の死者と一体化して行ったと解釈する方が、この短編の内容、及び『ダブリン人』全体の流れからも自然に思われる。

さらにこの結びの文章が詩的であることは先に述べたが、そこにこの短編の特異性を読み込める程、他の話における描写と違っているわけではない。例えば第三話の「アラビヤ」には語り手の少年が友人の姉を思う場面があるが、引用して「死せる人々」の結末と比較してみたい。

ある晩、僕は司祭さんがそこで死んだという、奥の客間に入って行った。暗い雨の降る晩で、家の中は静まりかえっていた。割れた窓ガラスを通して、雨が大地を打つ音、細かな水の針が絶え間なくずぶ濡れの花壇に降りかかるのを聞いた。どこか遠い所の灯が、明りのついた窓が下の方で光っていた。僕は目に見えるものが殆んどないことを、うれしく思った。五感のすべてがそれ自身を覆い隠そうとしているようで、自分が感覚を失いかけているような気がしたので、両方の掌を強く、ふるえるまで押し合わせて、何度も何度も、いとしいひと、いとしいひと、とつぶやいた (p. 31, 傍点筆者)。

ゲイブリエルとは、主人公の年令も情況も異なるが、傍点で示した、その静かさ、雨の描写、感覚の喪失を暗示する表現、さらに外景描写が主人公の心理を映し、次篇に描写が意識の内面へ移行してゆく技法は、「死せる人々」の結

末と共通する詩的な心象風景である。

この「アラビィ」は、主人公が少女への愛を金銭的に表わそうと考えていた自分に気付く、その裏切り行為と自分の愛の不純さを歎いて涙を流す場面で終る。「暗闇を見上げたときに、僕は自分が虚栄心に煽られ、それに嘲けられている情けない人間であることが分った。そして僕の眼には激しい痛みと憤りの熱い涙が溢れた。」(p. 35, 傍点筆者) この頭韻を使った言葉の激しさ「痛みと憤り (anguish and anger)」は、少年が自分の虚栄心にかられた行動を、いかに後悔しているかを表わすだけでなく、愛を金で買える贈物にすり替えて、愛の本質を無視していた自分の心の醜さをいかに強く感じたかをも示している。この涙は自分の精神的麻痺を自覚したものの流す、苦悩と怒りの涙である。

同様に、『ダブリン人』の丁度真中に位置する「小さな雲」も、主人公チャンドラーが、他人の助けを期待して、文名を高めようとはかない希望を抱いていた自分に気付く、己の無力さ、無能さを実感して涙を流す場面が結末となる。

小男チャンドラーは、恥辱で頬が真っ赤になるのを覚え、ランプの光から離れて立った。彼は子供のしゃくりあげがだんだん治まるのを聞いていた。その眼には自責の涙が溢れ始めた (p. 85)。

三十二才の主人公の流す涙は、チャンドラーの精神的な未熟さを表わしているとも取れるが、それ以上に、自分の失望を赤ん坊にどなりつけることによって紛らわそうとするような小心さ、醜さを自覚した涙であり、自分の生活の味気なさ、それに目を背けて、詩人と自称していた今までの自分が、現実を直視出来ない、精神的麻痺に陥っていたことに対する、自責の涙である。

「死せる人々」においても、終末近く、夫にマイケルのことを打ち明けて、泣きながらそのまま寝入ってしまったグレタの寝顔を見て、ギブリエルは、いままで娘時代の想い出を胸に秘めていたグレタの心境を思い、またその妻に死ぬほどの気持を抱いていたマイケルのことを思いやって、涙を流す。

寛容の涙がギブリエルの眼に溢れた。彼はこれまでどんな女性に対しても、自分ではそのような気持を感じたことはなかった。だが、このような感情こそ愛というべきものだと思ったのだ (p. 223)。

このギブリエルの「寛容の涙」は、グレッタやマイケルに対する哀れみや同情だけではなく、マイケルがグレッタに命を賭けて表現したような愛を、一度も感じたことのない自分へ向けた憐憫の涙でもある。先に述べたように、愛の本質も知らないままで、「彼を愛していたのかい、」と、グレッタに抽象的な「愛の概念」を押しつけようとしていたギブリエルが、初めてその本当の意味を感じた時の感動の涙であり、自分の感情の麻痺、精神的麻痺を自覚した涙でもある。

ジョイスの『ダブリン人』はダブリンの生活を描いて、アイルランド全体にも通ずる、精神的麻痺を批判した作品であるが、それはアイルランドの人々にその病状を自覚させるために書かれたものであり、「姉妹」から「死せる人々」に至るまでの麻痺の進行を、「私の磨き上げられた鏡」(書簡集, p. 90)に映し出すことによって、人々に反省を促そうとしたものである。ただ鏡が欠点と同時に長所をも映し出すように、『ダブリン人』には作者の街に対する愛着心が滲み出ている。三人の主人公が、自分の麻痺を認めて流した涙のように、『ダブリン人』は、いわばジョイスが病んだ祖国を想って流した涙ではないだろうか。

## 註

1. 短編集 *Dubliners* の題名の邦訳には『ダブリンの人々』(永松定),『ダブリン市民』(安藤一郎),『ダブリン人』(飯島淳秀)があるが、ジョイス自身、グラント・リチャーズに宛てた手紙の中で、「ここでは詳しく述べられませんが、多くの事情からも、『*Dubliners*』という表現は、私にとってある意味を持つように思われますし、同じことが、作家が題名に使っている『*Londoner*』とか『*Parisian*』という言葉にも当て嵌まるかどうかは疑問に思われます」と言っているように、「*Dubliners*」という言葉の持つ、地



- 方的、閉鎖的な雰囲気を表わすのには、「岩手県人会」とか「大阪人」の連想からも、「ダブリン人」が最も適当に思われるので、小論では『ダブリン人』を題名の邦訳として採択したい。
2. Richard Ellmann, ed., *Selected Letters of James Joyce* (London: Faber and Faber, 1975), p. 83; 以後『書簡集』と略す。
  3. A. Walton Litz, "Two Gallants" in Clive Hart, ed., *James Joyce's Dubliners: Critical Essays* (London: Faber and Faber, 1969), p. 63.
  4. Robert Scholes and A. Walton Litz, ed., *Dubliners: Text, Criticism and Notes* (New York: The Viking Press, 1971), p. 49; これ以降の『ダブリン人』からの引用及び頁数は、この版による。但し、その本文及び各短編の題名の訳は、安藤一郎訳、『ダブリン市民』(東京:新潮文庫, 1976)を多少の変更を加えて使用した。
  5. *The Irish Homestead* 版, 前述の Robert Scholes と A. Walton Litz 共編の *Dubliners* に収録, p. 238.
  6. Florence L. Walzl, "Gabriel and Michael: The Conclusion of 'The Dead'" 前述 *Dubliners* 収録, p. 428.
  7. Richard Ellmann, *James Joyce* (New York: Oxford Univ. Press, 1965), p. 254.
  8. Unsigned review, *Athenaeum*, 20 June 1914, 875 in Robert H. Deming, ed., *James Joyce: The Critical Heritage, Vol. One 1902-1927* (London: Routledge & Kegan Paul, 1970), p. 61.
  9. Anthony Burgess, *Joysprick: An Introduction to the Language of James Joyce* (London: André Deutsch Ltd., 1973), p. 65.
  10. Hugh Kenner, *Dublin's Joyce* (London: Chatto and Windus, 1955), p. 48.
  11. Homer Obed Brown, *James Joyce's Early Fiction: The Biography of a Form* (Cleveland: The Press of Case Western Reserve Univ., 1972), pp. 5-6.
  12. Marvin Magalaner and Richard M. Kain, *Joyce: The Man, the Work, the Reputation* (London: John Calder, 1957), p. 62.
  13. William York Tindall, *A Reader's Guide to James Joyce* (London: Thames and Hudson, 1968), p. 8.
  14. 1905年9月24日にジョイスは弟に次のように書き送っている。

話の順序は次の通りです。僕の子供時代を描いた、「姉妹」、「邂逅」ともう一つの話〔「アラビヤ」〕、思春期の話である、「下宿屋」、「レースのあと」、「イヴリン」、成人の生活を描いた、「土くれ」、「対応」、「痛ましい事件」、それにダブリンの社会生活を題材にした、「委員室のパネル記念日」、「母親」と最後の話〔「恩寵」〕です（書簡集 pp. 77-78）。

15. Robert Scholes, "Counterparts" in Clive Hart, ed., *James Joyce's Dubliners: Critical Essays*, pp. 93-94.
16. Brewster Ghiselin, "The Unity of Joyce's *Dubliners*", 前述の *Dubliners* 収録, pp. 316-22.
17. John William Corrington, "The Sisters" in Clive Hart, ed., *James Joyce's Dubliners: Critical Essays*, p. 17.
18. Kenneth Burke, "'Stages' in 'The Dead'" 前述 *Dubliners* 収録 p. 416.
19. Warren Beck, *Joyce's Dubliners: Substance, Vision, and Art* (Durham, N.C. : Duke Univ. Press, 1969), p. 359.
20. Darcy O'Brien, *The Conscience of James Joyce* (Princeton N.J. : Princeton Univ. Press, 1968), p. 240.
21. Edward Brandabur, *A Scrupulous Meanness: A Study of Joyce's Early Work* (Urbana: Univ. of Illinois Press, 1971), p. 115.
22. Bernard Benstock, "The Dead" in Clive Hart, ed., *James Joyce's Dubliners: Critical Essays*, p. 160.
23. Ad de Vries, *Dictionary of Symbols and Imagery* (Amsterdam: North-Holland Publishing Company, 1974), "snow".

## Summary

### ON JOYCE'S *DUBLINERS*: ITS RELATION WITH "THE DEAD"

Kazuhito Hayashi

Conspicuous among the criticisms of James Joyce's *Dubliners* is a view that the last story "The Dead" is different from other stories in the volume and that it shows a more favorable attitude toward Ireland than any other story. Contrary to such an opinion, this thesis tries to prove that "The Dead" shares with other stories common themes and narrative techniques that give unity to *Dubliners* as a whole. Also by pointing out some nostalgic, if not affectionate, references to Dublin throughout the book, I should like to discuss Joyce's ambivalent feelings toward the city.

As Joyce said in his letter to Grant Richards, "My intention was to write a chapter of the moral history of my country and I chose Dublin for the scene because that city seemed to me the centre of paralysis," *Dubliners* is a critical analysis of the morally paralyzed people of Dublin, yet the graphic descriptions of the streets and houses seem to betray the author's attachment to the city. Even those characters who are to be condemned and despised are carefully portrayed not only from outside but also from within, and therefore the reader cannot help feeling pity and sympathy for them.

On the other hand, the "Irish hospitality," often used in defence of the affirmative view of "The Dead" seems dubious and loses its good quality in the context of the story. This last story, in my opinion, has little difference from earlier stories, and its famous ending is not so unique a passage compared to other passages in the book. If "The Dead", which is filled with images of death as the title suggests, is read against the background of the fourteen preceding tales, it is nothing but a culmination of paralysis whose different stages are

depicted through the book, and its ending of white death descending over entire Ireland makes an appropriate conclusion to *Dubliners*.

These clinically accurate chronicles of Dublin's paralysis, however, have remedial value. Joyce meant to call indifferent Dubliners to their deplorable conditions by showing the city and its people in his "nicely polished looking-glass." Yet as a mirror reflects merits as well as demerits, the book reflects Joyce's ambivalent feelings toward his home country. If another simile is allowed, just as the three characters' tears when they have realized their paralyzed states, *Dubliners* seems to me tears of understanding and sympathy Joyce sheds for sick Ireland.